

令和6年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月11日実施)	総合評価（3月31日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①グローバル社会における多様な価値観を理解し、協働して社会で活躍できる人材を育成する。 ②学校行事や生徒会活動を通じて、主体的に課題に取り組む姿勢を養う。	①校内の ICT 機器、生徒のタブレット等を利用し、インタラクティブな学習活動を充実させる。学習アプリを活用し、個別最適な学習の主体的な取組みにつなげる。 ①外国語教育の充実、姉妹校を含む国際交流、海外修学旅行等、国際社会へ参画する力を育成する。 ②体育祭及び氷焱祭の時期を見直したが、適切かどうかを検証する。 ②生徒が積極的に行事や委員会活動に取り組み、自らのコミュニケーション能力を発揮する力を育成する。	①ICT 機器、生徒のタブレット等を効果的に活用し生徒間や教員との相互的な活動をもとに学びを深める。 ①学習アプリを利用し、対話的な学習活動や個別最適な学習活動を行う。 ①オンラインでの交流も続けながら、直接交流の際にはより多くの生徒が関わられるような機会をつくる。 ①日常的に「話す」活動を積極的に取り入れ、スピーチ・プレゼンテーションコンテストの質的向上を目指す。 ②多くの教職員が、学校行事、部活動等について本校 HP の更新を積極的に行う。 ②各行事の前後の活動に無理が生じていないか方面ごとに検証する。 ②生徒同士がコミュニケーションをとりながら、生徒主導で行事を組み立てられるよう、教員が投げかける形で行事・委員会活動を進める。	①生徒のタブレットや ICT 機器を用いたインタラクティブな活動がデータ上からも十分に実施できたか。 ①授業改善につながるような学習アプリ等の研修を実施できたか。 ①様々な国際交流を行うことで、国際理解教育がより充実したものになったか。 ①様々な国際交流に参加した生徒たちの達成感や充実感の向上が図れたか。 ①スピーチ・プレゼンテーションコンテストを通して、英語力の向上を感じるとともに、グローバルな視点を養うことができたか。 ②令和5年度に比べて、HPの更新頻度が上がったか。 ②各行事の進捗状況は効率が良かったか、方面ごとに振り返る。 ②行事・委員会活動ともに振り返りの場を設け、生徒主体で進めることができたかを検証する。	①校内研修や授業見学などを実施し、ICT 機器を用いた環境でインタラクティブな授業への改善を全体的に進めた ①生徒の学習アプリの利用を進め、タブレットを利用した学習の定着を進めた。 ①5月にニュージーランドの交流校から生徒を受け入れ、また8月に韓国姉妹校を訪問した。12月に韓国姉妹校からの生徒を受け入れた。さらに韓国、オーストラリア、ニュージーランド、フィリピンの交流校とオンライン交流を行った。 ①韓国姉妹校交流において、1・2年生全員が参加する歓迎会を実施したり、国際交流委員主体の交流会を実施したり、韓国の高校生が授業に参加したりするなど、より多くの生徒たちと交流する機会を持てた。 ②生徒が直接携わる学校行事については、定期試験の実施日を変更したこともあり、無理なく実施できた。 ②生徒が主体的に行事運営に携われるよう、企画の段階で生徒との協議事項を増やした。	①ICT 機器やアプリの進化に伴い、授業への応用の幅が広がってきている。校内研修を続け、新たな環境に教員全体が対応できるようにする。 ①生徒がどのように学習アプリを活用できているかをよく把握し、より深い学びが可能となる授業改善につなげる。 ①直接交流、オンライン交流のどちらにおいても、その成果等について生徒から発信する機会を設け、さらに実りのある交流にしていこう。 ②行事終了後、翌年の行事計画についての協議を行い、生徒にとってよりよい行事の企画・立案に努める。 ②令和5年度に比べて、HP、SNS の更新頻度は3割程度上がったが、まだまだ丁寧な情報発信は課題であるため、本校の活動や魅力を伝えるという基本に立ち返り、効果的な情報発信について引き続き検討する。	①ICT 機器を活用した教育や国際交流が積極的に行われ、横浜氷取沢高校の特徴として定着していることを理解できた。 ②小学校でも同様に学校評価に関するアンケートを実施しているが、保護者に伝わりやすい方法を模索し、回答率が向上した。 ②コロナ禍を経験した子どもたちが、高校進学後どのような影響を見せるのか注視したい。 ②大学でも対面授業に苦手意識を感じたり、オンライン授業を望んだりする声も聞かれる。高校での合理的配慮について共有したい。 ①国際交流を通じて、生徒のグローバル意識が向上していることが理解できた。日常的に英語にふれることで、外国人や文化を抵抗なく受け入れられている様子がうかがえる。	①ICT 機器を活用した授業については、電子黒板等の設置および一人一台端末の実施から数年が経過し、ほぼ全職員が授業で活用し一定の成果を上げている ①今後は自立型の電子黒板が導入されるため、使用法や教室内の配置を検討する必要がある。 ①グローバル教育研究推進校の指定から3年が経過し、様々な取り組みを通じて職員、生徒ともに国外の文化や考え方に関する関心が高まった。	①新電子黒板に関する有志委員会等を設置し、自由にアイデアを出し合って活用について検討する。 ①ICT 機器を活用した授業改善については、グローバル教育研究推進指定校事業に係る授業改善ミッションを軸に、実効性の高いプロジェクトを計画する。 ①他のグローバル教育研究推進指定校と活発な情報共有や意見交換を行い、参考になるものは積極的に取り入れ、本校の取り組みをより一層充実させる。
2	(幼児・児童・)生徒指導・支援	①生徒一人ひとりに寄り添い、教育相談体制を充実させる。 ②部活動や行事を通して連帯感や責任感の涵養を図る。	①かながわこどもサポートドックと教育相談(いじめ)アンケートのシームレスな実施を目指す。 ①SCとSSWの勤務日違いの問題を、今年は職員へのしわ寄せが解消できるよう継続的に工夫する。 ②生徒間の人間関係が健全に構築できるよう、指導を工夫する。 ②部活動の活動報告や大会情報を生徒の目に多く触れさせ、相互の活	①かながわこどもサポートドックの項目追加の工夫と、ペーパーベースの教育相談(いじめ)アンケートの実施によりスピーディー且つ効果的に潜在的いじめ・いじりなどのあぶり出しをする。 ①昨年度に継続し、定例コア会議の活用を通し、生徒の課題への気づきを進める。 ①個々の生徒が、人間関係こじれなどに起因するメンタル事象を乗り越えられるような精神的自立を促す	①かながわこどもサポートドックにより明らかになった点を生徒支援に生かすことができたか。 ①教育相談(いじめ)アンケートによる情報収集により、生徒の人間関係の問題点を把握し、支援に生かすことができたか。 ①コア会議が、生徒の抱える問題の気づきに活かされたか。また課題のある家庭の掌握に役だったか。 ①生徒が抱える課題について、どのような指導の工	①かながわこどもサポートドックにより明らかになった点を、ていねいに支援していくことができた。 ①いじめアンケートによる情報収集が、生徒の人間関係不調などの問題把握と支援に生かされた。 ①コア会議が、生徒の抱える問題と課題のある家庭への気づきと掌握に役だった。 ①生徒が抱える課題に関する指導の工夫をコア会議・学年会・職員間の意	①かながわこどもサポートドックの煩雑なステップとスクリーニングを効率的に実施していく一方で、丁寧な分析を行って最適な支援を心がける。 ①紙面によるいじめアンケートは、速やかな実態把握という点で有効であるが、無記名回答の生徒掌握については精度を高めていく必要がある。 ①コア会議が計画通り開催しづらいという状況があるため、実施するタイミングをうまく調整する必	①いじめアンケートで、生徒は「無記名といっても記名と変わらない」と認識してしまい、無記名者として本心や本当の意見を書けない状況になってはいないか。 ①かながわこどもサポートドックや教育相談アンケート、コア会議などを機能させて、丁寧な指導・支援をされていることを理解できた。コロ	①いじめアンケートやかながわサポートドックの実施により、生徒をとりまく様々な負の環境に関する把握の精度が向上した。 ①センシティブなアンケート調査については、記入者の把握という点で課題がある。 ②部活動の大会結	①担任や教科担当者などの見解を、アンケートには表れにくい生徒の状況把握に反映させることで、よりきめ細かな生徒支援を目指す。 ①アンケートの記入者把握や回収方法について、他校の実施例等も参考にしながらより良い方法を模索する。

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月11日実施)	総合評価（3月31日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
			動を認め合い、連帯感をはぐくむ。また、救急救命講習会等を通して部活動に参加している責任感を育む。	指導をさらに充実させる。 ②昇降口モニターやHPを通して、相互の活動を高い頻度で発信し、応援やコミュニケーションに繋げる。	夫が可能であったか、意見集約などで検証する。 ②部の活動報告や大会結果など情報を、必要十分な頻度で発信ができたか。	見交換を通して共有することができた。 ②HPの部活動情報については、校内での呼びかけにより、各顧問の意識が向上し、以前より大会結果や活動状況の報告が一定数増加した。	要がある。 ①課題を抱える生徒・家庭が非常に多いため、コア会議・学年会・職員間の意見交換は有意義に機能したが、個別対応の時間不足が課題となった。 ②担当からは、大会前後にHP更新や昇降口モニターへの情報更新を呼びかけ、また、生徒会の生徒による情報収集やモニター発信について模索していく。	ナ禍の影響が残っている生徒の対応にもご苦労いただいている様子がうかがえた。	果等や各種行事に関する画像や映像を、積極的に昇降口モニターに投影することにより、生徒の学校への帰属意識や愛校心を高めることができた。	②部活動や生徒会活動の情報については、教員だけでなく生徒会執行部や部活動に関わる生徒らによる発信も検討していく。
3	進路指導・支援	①自己と集団や社会との関わり、職業観、倫理観、使命感等を育成する。 ②自他の幸福を追求し、自立し、たくましく生きるための基礎力を身に付けさせる。	①生徒が自己の人生をプランニングできる能力を開発する。 ②生徒の他者を思いやる心や、社会に貢献する意欲を育む。	①生徒に単に進路希望を問うだけでなく、自己の生き方あり方を問いかけるガイダンスを実施する。 ②個別学習に対応したシステムを全学年に導入し、学びの基礎力を高める。	①進路支援グループ職員を核とし、各学年の教職員が共通の視点で指導を行えたか。 ②スタディサブリを全学年導入し、個に対応した学びを充実させることができたか。	①学年団職員に各行事の意義を十分理解してもらい総合的な探究の時間やLHRの時間を計画的に活用して、充実したガイダンスを実施できた。 ②一斉導入をした1・2学年団の協力により、5教科の授業担当が年間を通じて多くの課題の配信を行い、生徒もよく取り組んだ。	①探究的な学びが生徒の進路希望の具体化やその実現につながり、各行事の実施において教員が意識を共有できるよう心掛けたい。 ②次年度は全学年一斉導入となる予定である。3学年の利用にあたり受験指導に十分に活用できるよう計画的に取り組みたい。	①生徒自身の生き方・あり方や社会との関わり方を考えさせた上で、進路指導・支援して、生徒の希望を実現されていることを理解できた。 ①スタディサブリの利用率が高いとのことだが、実際に基礎や応用力が向上しているかの検証をお願いしたい。	①大学進学が約85％、短大2％、専門学校1％となった。就職希望者は公務員や名のある企業への入社ができた。 ②スタディサブリの活用率については、他と比較しても高い実績となった。	①現状からさらに一段上を目指した大学受験を目指すよう、進路支援の側面から情報を発信する。 ②スタディサブリを利用した学習効果をより一層高めるための方策を検討する。
4	地域等との協働	①家庭、地域の教育力を活用し地域との交流活動を通し、保護者や地域に信頼される学校づくりをめざす。	①本校HP、X（旧Twitter）等の広報媒体を充実させる。 ②学校運営協議会委員との協働等により、様々な形の地域連携を模索する。	①各媒体の更新頻度を増やし、新しい情報を随時発信する。 ②地域が本校に対し、どのような貢献を求めているか、学校運営協議会等を通じて情報収集し、可能なところから協力していく。	①HPの更新頻度が令和5年度に比べて増加したか。 ①新しい情報、求められる情報等の発信が安定的に行われていたか。 ②学校運営協議会等で収集した情報を地域貢献に生かすことができたか	①令和5年度に比べて、HP、SNSの更新頻度は上がり、本校の行事や活動についての情報発信量は増加した。 ②学校運営協議会委員から提供される、各学校や地域組織で開催されるイベント等を周知できた。	①地域等との協働に関しては、HPによる情報発信が核となるため、内容や発信頻度について継続的に学校全体の課題として検討していく必要がある。 ②地域のイベント等に参加する時間の確保や、参加頻度の増加についてはまだその余地があるので、今後は校内でさらに地域との連携を呼びかける。	①HPやSNSは、アクセス数や閲覧状況が把握できるとよいのではないかと。 ②地域との交流を強く意識され、情報発信に努められていることを理解できた。課題もあるようだが、継続的な関係づくりが必要と感じた。 ②さわの里小学校で防災訓練を地域と連携して行っているの、そこへの参加を検討されたい。	①HPや公式Xへの情報発信について、内容や発信数を記録・共有することで、職員の広報に関する意識を高める必要がある。 ②さわの里小学校児童に対する学習支援を再開することができた。	①HPや公式Xのアクセス数をカウントする方策を検討し、閲覧状況の把握に努める。 ②地域の防災訓練や、地域ケアプラザとの協働について、学校運営協議会委員と連携しながら実施に向けて検討する。
5	学校管理 学校運営	①安全で安心な学習環境の維持に努め、点検・改善に努める。 ②信頼かつ信用ある学校経営に努め、事故不祥事根絶に向け、強い決意をもって臨む。	①丁寧な広報活動を目指す。 ①様々な機会を通じて生徒の防災意識を高める教育活動を行う。 ①生徒が主体となって美化活動と資源の再利用に努める。 ②成績処理支援システム等を用い、成績処理や生徒の情報管理を一元的に行うことで個々の業務の効率化を図る。	①各種説明会、学校案内等において、生徒が活躍できるような場を増やし、生徒及び保護者の目線に立った広報活動を行う。 ①現況に即した防災訓練を実施すると共に、DIG等を実施する。 ②成績処理支援システム等を利用して、日々の出欠等の生徒の情報を電子的に管理することを徹底する。	①各種説明会において、生徒が中心になって進み、生徒が活躍する場となったか。 ①アンケートを通じて生徒の防災意識が高まったか。 ①アンケートを通じて生徒の校内美化意識や資源回収意識が高まったか。 ②生徒の情報の電子管理が徹底され、成績処理期間にその確認作業が偏らないか。	①学校説明会において、有志の生徒20～25名が各教室にて説明会の司会を行ったり、ダンス部全員が校内ツアーとして来場者の校内案内を実施したりした。 ②生徒の出欠情報等の管理を日々行い、毎月の生徒への通知確認をおこなった。このことで成績処理期間の業務の偏りが緩和された。	①参加する生徒の数や、参加する場面については、各説明会ごとに令和5年度よりも増えた。今後も引き続き生徒が主体になるような学校説明会などの広報活動を企画・立案していく。 ②今後成績処理支援システムでの情報一元管理を進めるため、年度当初に活用についての研修を実施するなどして、組織的にその利用を進めていく。	①学校行事への生徒の協力機会が増え、学校の特色として外に伝わっており、特色にあった生徒募集に繋がっていると感じた。 ①グローバル教育が軌道に乗り、生徒にも好ましい影響を与えていることが感じられる。 ②不祥事防止に関する取り組みが充実していることが理解できた。	①学校施設の点検を丁寧に行い、学校関係者が安全に過ごせる環境を保持する必要がある。 ①防災意識を高める行事や研修実施の必要がある。 ②本年度は重大な事故・不祥事は発生しなかったが、諸々の課題については解消に向けて検討する必要がある。	①大きな自然災害が起こっていないことから、防災意識がやや薄くなっているため、有識者や震災経験者などによる研修を改めて行う。 ②引き続き不祥事防止に係る様々な取り組みを継続し、職員のコンプライアンス意識保持に努める。